

島根県における明治時代初期の主要産業の一つは「たたら製鉄」であり、県内に豊富に存在する木材と、中国山地の砂鉄を用いた製鉄業は古くから盛んに行われていた。また、島根県の東部にあたる出雲地方では、江戸時代から綿作が広く行われていたことを背景に、綿糸や織物といった繊維産業が発展し、明治時代半ば以降は養蚕・生糸が広まっていった。

一方、島根県の西部である石見^{いわみ}地方では石見半紙（石州和紙）と呼ばれる和紙の製造が行われ、その強靱さが認められて大阪など全国の市場で販売されていた。石州瓦も石見地方の代表的な生産物であり、その優れた性質から高い評価を受けていた。

これらの中でも、特に繊維産業は明治時代から大正時代にかけて大きく発展し、この時代の島根県を代表する産業となる。

1. 明治維新と島根県の成立

(1) 版籍奉還と廃藩置県

明治維新によってわが国の体制は大きく変わることになった。幕府が倒れ、新政府が樹立されたことによって、それまで江戸幕府を支えてきた藩体制が廃止されることになったのである。

まず、1869年（明治2年）の版籍奉還によって、各藩の管理下にあった土地や人民について新政府に属するものとされ、いわゆる権限の中央集権化を図ったものであった。また、各藩の藩主は藩知事となり、中央から任命されて各地を統治する役割を担うという立場に変わった。

次いで、1871年（明治4年）には藩を廃止し、その代わりに県を設置する廃藩置県が行われた。廃藩置県の直後は旧藩の領有地をほぼそのまま県に移行した形であったため、全国で三つの府と302の県が成立することになった。

現在の島根県のエリアにおいては、廃藩置県当初は松江県、母里^{もり}県、広瀬県、浜田県の4県が置かれたが、これらはいずれも江戸時代末期から明治時代初期にかけて存在していた藩や県を継承したものであった。

① 県東部（出雲地方）

廃藩置県後に設置された4県のうち、母里県の

前身の母里藩（後の能義^{のぎ}郡伯太町[現：安来市]付近）、広瀬県の前身の広瀬藩（後の能義郡広瀬町[現：安来市]付近）については、もともと松江藩の支藩（藩主が家督相続権のないものに領地を分与するなどして設立された小藩）であり、設置当初は領地も定められていなかった。後に領地が分与されたものの、母里県、広瀬県のエリアは非常に小さかった。

② 県西部（石見地方）・島嶼部

現在の島根県の西部地域（石見地方）では、浜田藩、津和野藩が存在していたが、浜田藩は幕末の征長の役（長州征伐）の際に、幕府側として参戦し敗退して長州藩に占領されることになる。明治維新後もしばらくは長州藩の支配下にあったが、1869年（明治2年）に大森県が置かれたことにより、長州藩による占領に終止符が打たれることになった。大森県は銀山のあった大森に県庁を置いていたが、1870年初旬には県庁所在地が大森から浜田に移され、大森県は浜田県と改称することになる。

また、島嶼部の隠岐^{おき}については、江戸時代には松江藩の支配下にあったが、1869年には隠岐県が置かれて松江藩から独立した。しかし、同年半ば以降、大森県（浜田県）の管轄下に組み込まれ

ることになる。

以上のように、島根県エリアの中でも石見地方と隠岐は複雑な経緯をたどっており、東部の出雲地方とは異なる特徴を持った地域であったことがわかる（図表1）。

その後、1871年の廃藩置県により成立したのが松江県ほか3県であったのは既に触れたとおりだが、その際、津和野藩は浜田県に組み込まれることになる。

（2）島根県の成立

1871年の廃藩置県はもとの藩のエリアを継承して県に移行しただけであり、多様な規模や境界を有する県があって、その後の県の運営に支障をきたす可能性があった。このため、廃藩置県直後から県の整理・統合が進められていった。

まずは、1871年4月に松江県、母里県、広瀬県が統合されて島根県が成立した。さらにこの島根県に、浜田県から分離した隠岐が組み込まれることになったが、同年12月には隠岐が鳥取県に移管されることになる。一方、浜田県については、隠岐が分離されたものの、そのまま浜田県としてしばらく存続することになる。

1876年（明治9年）になって、政府はさらなる県の整理統合を行うべく太政官布告が行われ、この年の4月には浜田県が廃止されて、島根県と統合され、新たに島根県が設置されることとなる。さらに、8月には鳥取県が廃止され、現在の中国地域における山陰側全体を管轄する島根県が成立したのであった。このとき、廃止された県の中に

は鳥取県の他に、石川県などに統合された敦賀県（現：福井県）、愛媛県に統合された香川県、高知県などに統合された名東県（現：徳島県）、鹿児島県に統合された宮崎県などがあり、全国で14県に上った。

ただ、その直後から、旧鳥取県において県の復興を求める運動がみられるようになる。旧鳥取県の西部である伯耆地方については出雲地方に近く、中でも米子を中心とした地域では県庁所在地は鳥取より松江の方が便利であって、しかも鳥取県の独立による税負担の高まりに対する懸念もあったことから、鳥取県の復興については消極的であった。しかし、かつて政治的な中心地であった^{おうみ}邑美郡鳥取町を中心とした因幡地方では、経済活動の衰退や旧因幡藩士の窮乏などもあって、鳥取県の復興運動が盛り上がりを見せつつあった。

このようなことから、1881年（明治14年）になって、鳥取県が島根県から分離され、再配置されることになる。その際、隠岐については、島根県の管轄として残されることになった。こうして、島根県を中心とした山陰地域は明治維新から短期間のうちに何度も行政単位の変更があったものの、1881年になってようやく現在の島根県エリアが確定することになった。

2. 明治時代初期の主要産業分布

（1）たたら製鉄

江戸時代から明治時代にかけての最も重要な産業は、全国的に米作を中心とした農業であったことはいうまでもない。また、日本海に面した沿岸部では漁業が活発であり、さらに中国山地に近い山間地域では林業も行われていた。

江戸時代から明治時代にかけて、中国地域の山間部を中心に広く行われていたものに、たたら製鉄がある。中国山地は磁鉄鉱を含む花崗岩が多くみられることが特徴となっており、土砂の中に含まれる砂鉄を採取して、古くから製鉄業が行われてきた。

また、たたら製鉄は中国地域の中でも、現在の島根県エリアで盛んに行われており、山間部のみならず沿岸部にかけても存在するなど、重要産業の一つであったことがうかがえる。

たたら製鉄は原料となる砂鉄が必要になるだけ

図表1 山陰地域の県の変遷

	江戸時代以前	明治維新～廃藩置県前	1871年	1876年	1881年
出雲	松江藩	松江藩	松江県	島根県	島根県
	母里藩	母里藩	母里県		
	広瀬藩	広瀬藩	広瀬県		
石見	浜田藩	長州藩に占領	大森県 浜田県	浜田県	島根県
	津和野藩	津和野藩	浜田県		
隠岐	—	隠岐県 大森県 浜田県	島根県	島根県	島根県
因幡	若桜藩	若桜藩	鳥取藩	鳥取県	鳥取県
	鹿奴藩	鳥取藩			
伯耆	鳥取藩	鳥取藩	鳥取県	鳥取県	鳥取県

資料：島根県「新修島根県史 通史編2 近代」ほか

でなく、熱源として大量の木炭を用いる。従って、山間部ではたたら製鉄向けの木炭製造も広く行われていた。輸送手段が貧弱であった時代は、木炭の長距離大量輸送が難しく、しかも採算が取れなかったこともあって、需要地の近くで木炭製造が行われていた。つまり、たたら製鉄と木炭製造は不可分のものであった（図表2）。

たたら製鉄は、江戸時代には大砲などの武器の製造に貢献し、松江藩などにおいては鉄山維持のための保護政策も行われてきたが、明治時代に入って廃藩置県による藩の消滅とともに保護がなくなり、しかも外国からの鉄の輸入が増加していったため、たたら製鉄は危機的な状況に置かれることになる。

しかし、たたら製鉄は島根県の基幹産業であったことから、製鉄業の衰退が県経済に大きな影響を与えかねず、県としても救済措置を講ぜざるを得なくなる。加えて、殖産興業と軍備拡充が進められる中、唯一の官営製鉄所であった釜石（岩手県）の失敗などもあって、中国地域のたたら製鉄が見直されることになる。こうして、明治時代半ば以降、たたら製鉄は再び盛り上がりを見せる。

（2）綿糸・綿織物

木綿は古くから重要な衣料原料であり、特に江戸時代中頃からは一般庶民の衣服として普及したため、米作の他に綿や藍を栽培する農家が増えていった。当時、綿は換金作物としても唯一のものであり、綿作を奨励する藩主もあったため、各地で綿の栽培が盛んに行われるようになった。

島根県では出雲地方の西部、現在の出雲市を中心とした地域（当時の^{たてぬい}楯縫郡、出雲郡、^{かんど}神門郡の3郡）で特に綿作が活発に行われ（図表2）、その綿を使った綿織物が製造されるようになった。綿糸や綿織物を藍などで染める紺屋も各地に出現し、多くの紺屋を束ねる座（組合）が組織されていた。こうして、出雲地方で製造される木綿製品は次第に販路を広げ、大阪市場では雲州木綿として高い評価を得ていた。

明治時代に入って以降も木綿はこの地域の重要な生産物となっており、明治時代初期には綿作地帯の3郡のうち、楯縫郡における木綿生産額が米の生産額を上回るなどの状況もみられた。その後は、海外からの安価な木綿の流入などにより島根

県内での綿作は衰退していくことになるが、これに代わって発展していくのが養蚕業である。いずれにせよ、出雲地方は県内有数の繊維工業地帯であったといえる。

（3）製紙業（和紙）

島根県の中でも、津和野藩、浜田藩を含む石見地方で発達した代表的な産業に製紙業がある。津和野藩では室町時代の半ば頃から紙漉きが奨励されていた。江戸時代に入ると、製紙業の保護と発展のための政策をとりながら、原料となる楮^{こうぞ}の増殖を図った。津和野付近は山岳地帯が多いという地形上の問題もあり、米作に不安があったことから、山の傾斜面を利用した楮^{うるし}や漆、櫨^{はげ}などの植え付けが行われ、これらが藩の重要産業となっていた。また、津和野藩では紙の専売制を敷き、年貢米に代わって紙による収納が認められるようになったが、一方で紙の強制的な収納割り当てが行われるなど、農民の負担ともなった。

浜田藩においても、製紙業は古くから行われていたが、津和野藩の和紙生産高が次第に上昇し、収益が上がっていることを知って、農民の副業として紙漉きを奨励した。これにより、紙の生産が急増していった浜田藩では、津和野藩にならって藩の専売事業として製紙業を行うようになる。

このような、石見地方で生産された和紙は石見半紙（石州和紙）と呼ばれ、その強靱さが認められて江戸や大阪などで賞賛を受けたため、一層販路が拡大していったといわれている。

（4）鉱業

島根県内には^{にま}邇摩郡の石見銀山をはじめ、^{やつか}八束郡の^{ほうまん}宝満山（銅）、^{かのあし}鹿足郡の^{ひかわ}笹ヶ谷銅山、^{わにぶち}簸川郡の^{おおち}鱒淵鉱山（銀、銅）、^{おおち}邑智郡の銅ヶ丸鉱山（銅）などがあった。これらの中には、古くに開発され、その後湧水などのため放置されていたものもあるが、いずれも明治時代の初期から中期にかけて再開していった。

①石見銀山

16世紀以降、全国的に金山・銀山の開発が進められたが、西日本で著名な銀山として知られていたのが石見銀山（大森鉱山）であった。石見銀山はかつての邇摩郡大森村（現：大田市）を中心と

した山間部に広がっており、西日本における代表的な銀山となっていた。

石見銀山の歴史は古く、既に14世紀頃にはその存在が知られていたとみられている。本格的に銀山の開発が行われるようになるのは、16世紀からとなる。ここで採掘された銀鉱石は国内初の現地精錬に成功し、これによって石見銀山の産出高は大幅に増加した。当時、わが国で算出される銀は世界でも高いシェアを占めていたが、石見銀山はこのような国内での銀の生産をリードしていたといわれている。

徳川幕府の直轄地になって以降、石見銀山はさらに開発が進められたが、1690年(元禄3年)の年間産出高2.3トン(613貫)をピークに銀の産出高は徐々に低下、幕末頃には年間100～150kg程度へと激減した。これは、坑道延長に伴う換気と水抜きが困難になっていったことによるものである。

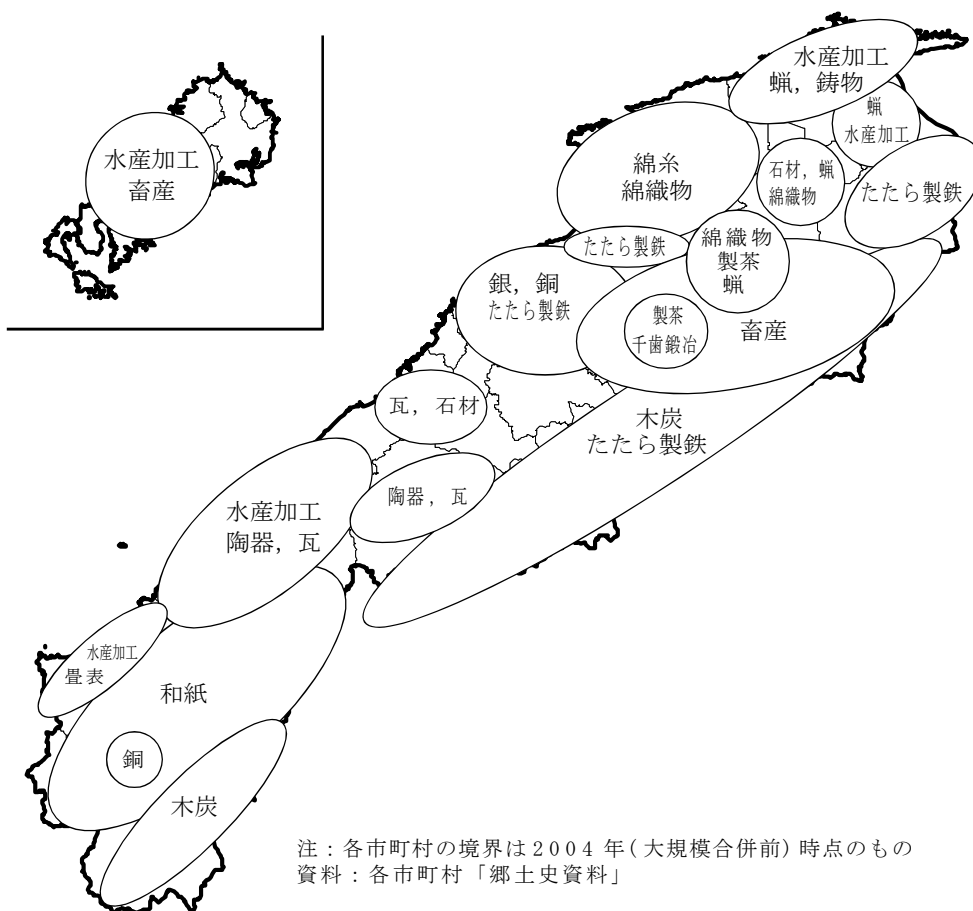
明治維新後の1869年(明治2年)には銀山は政府の管理するところとなり、大森の有志によって鉱区の経営が再開された。その後、1872年(明治5年)の地震によって打撃を受け、翌1873年には再開されたもののうまくいかず、1886年(明治19年)に大阪の藤田組が買収するまで石見銀山の採掘はほぼ休止状態となる。

②その他の鉱山

宝満山は八束郡出雲郷村(後：東出雲町、現：松江市)に位置しており、1865年(慶応元年)に松江藩によって開発された。1873年(明治6年)には政府の管轄となり、翌年から地元有志などによる経営が行われ、新鋭機械を導入して発展していくことになる(1921年[大正10年]に休止)。

鱒淵鉱山は簸川郡鱒淵村(後：平田市、現：出雲市)にあって、以前は金山銅山と呼ばれていた。松江藩によって銀や銅の採掘が行われていた

図表2 島根県における主要産業の分布(江戸時代～明治時代初期)



が、産出量がそれほど多くなかったため、休止していた。明治時代に入り、1873年（明治6年）から経営が再開されたが、業績不振が続き、経営者の交代が相次ぐことになる。

銅ヶ丸鉱山は、邑智郡吾郷村（後：邑智町、現：美郷町）にあって、石見大森銀山より前に発見されていたとみられている。江戸時代には何度か掘削が行われたものの、生産量そのものはそれほど多くはなく、明治時代に入るまでほぼ休止状態となっていた。1873年に入り、松江の商人が採掘を再開し、明治時代半ば頃には最盛期を迎えるが、1909年（明治42年）の火災によって建物・機械すべてが焼失し、閉鎖された。

（5）窯業製品

①陶器

出雲地方の陶器で現存しているものに、松江の楽山焼、袖師焼がある。このうち、楽山焼は1677年（延宝5年）に萩から陶芸家を招いて製造を開始したことに始まるとされている。創設以来300年以上の歴史を誇る伝統産業となっており、主として茶器、花器、酒器などが製造されてきた。

一方、袖師焼については、1877年（明治10年）に、意宇郡乃木村（現：松江市）に良質の粘土が存在することを知って素焼窯を築いた尾野友市が、1894年（明治27年）に宍道湖沿いの袖師ヶ浦に窯を移転したことから始まった。釉薬に意宇郡来待村（後：八束郡宍道町、現：松江市）で産出する出雲地方特産の来待石を利用し、主として花器や食器類などが作られた。

②瓦

石見地方の瓦は石州瓦と呼ばれており、愛知県の三州瓦、兵庫県淡路島の淡路瓦と並んで三大瓦の一つとなっている。また、生産規模も三州瓦について全国第2位となるなど、現在も高いシェアを誇る。石州瓦の起源は1619年（元和5年）に築城のための瓦職人を大阪から招いたことに始まるとされている。

また、1806年（文化3年）頃から来待石を釉薬として用いた赤瓦の生産が始められ、何件かの瓦工場があったとみられている。石州瓦は1,300度といった高温で焼かれるため、強靱で温度変化にも強いという特徴があるが、この高い焼成温度に

耐えうる陶土が必要になる。石見地方に産出する陶土はこうした高温での焼成に適したものであり、このことが高品質な瓦を製造できる大きな要因であった。

江戸時代の末期から明治時代にかけて瓦葺の民家が増加していったことから、瓦職人が次第に多くなり、瓦窯が各地に構築されて今日の石州瓦の基盤が確立されていった。石州瓦は低温に強いといった特色から、多雪地帯であった北陸など寒冷地で広く利用され、やがて温暖な中国地域や九州などへも販路を拡大していった。

（6）地場産業・その他

①千歯鍛冶

大原郡木次村（後：木次町、現：雲南市）では、付近でたたら製鉄が行われていたこともあったためか、江戸時代から銑鉄を鍛えて鍛鉄を製造する大鍛冶屋があり、この他にも鉄製品を製造する鍛冶屋が多くみられた。この中でも、釘づくりを本職としていた榊原家は、千歯の本場であった倉吉に釘を販売していた関係から、倉吉より千歯の製法を学び、1839年（天保10年）頃から千歯業を始めた。

木次の千歯は倉吉産より価格が安く、品質にも優れていて脱穀能力が高く、さらに熟練した千歯職人が修繕のために各地を巡回したことから、島根県内のみならず全国各地に普及していった。また、1877年（明治10年）から1895年（明治28年）にかけて行われた内国勸業博覧会では、4回の褒状を受けており、千歯の本場であった倉吉をしのぐ名声を博し、全国市場で確固たる地位を占めたのであった。

明治時代半ばから後半にかけて、木次千歯は最盛期を迎えるが、1914年（大正3年）に至って佐藤造機による廻転式足踏稲麦扱機（足踏み式の回転式脱穀機）が発明され、これ以降農業の機械化が進んでいったため、千歯は次第に廃れていくことになる。

②雲州そろばん

現在、国の伝統工芸品に指定され、そろばんの主産地となっている雲州そろばんは、江戸時代の天保初年頃から仁多郡亀高村（後：仁多町、現：奥出雲町）の大工であった村上吉五郎によって製

図表3 雲州そろばん伝統産業会館の大そろばん



作されていた。名工として評判の高かった村上氏は、周囲の勧めもあって芸州（広島）の塩屋小八が製作したそろばんを真似て試作を行ったのが、雲州そろばんの起源だといわれている。

当時、そろばんの製法は極秘であったため、製造が広まらなかったものの、1850年（嘉永3年）頃から横田村（後：横田町、現：奥出雲町）の高橋常作が技法を習得することに成功した。以後、横田村では多くの手工業者がそろばん製造の伝習を受け、明治初年には亀嵩村をしのぐ生産高となっていた。

なお、そろばんが全国的に販売されるようになるのは、明治時代半ば頃から簸川郡の行商が持ち歩いたことがきっかけである。木次千歯も同じ頃に行商人によって全国に販売されていたことから、千歯の販売ルートがそろばんの販売にも利用されていた可能性もある。

明治時代末期には商品流通の組織も整備され、これ以降、雲州そろばんは順調な発展を遂げることになる。

3. 殖産興業と士族授産

（1）専売制の解体と民営化

①松江藩の主要な専売品

近世の島根県における代表的な農産加工品（特産物）や製造品は、人参、蠟、紙および鉄であり、全国的にも評価が高かったといわれている。全国的に産地が限定されていたこともあり、藩の財源として専売制の支配下に置いていた。

これらのうち、人参は主として松江藩での専売品であり、当初は高級薬種として清国商人によってもたらされた。幕府は貿易による金銀流出を抑制するため、人参の国産化を図り、出雲のほか野州（北関東）、陸奥（東北）、信濃（長野県付近）、越後（新潟県付近）などで朝鮮産に劣らない品質のものが生産されるようになる。松江藩では「人参方」が人参の専売を取り扱い、安定した取引きを行っていた。

蠟については、1608年（慶長13年）の松江大橋架橋の際に、美濃から来た大工が伝えたといわれている。松江藩では製鉄に力を入れており、当初は製蠟にそれほど積極的ではなかったが、1700年代半ば以降、藩に「木実方」が置かれ、蠟の原料となる櫨（はげ）の栽培を進めていった。

1871年（明治4年）の廃藩置県に伴い、これらを統括していた人参方、木実方、釜甌方（ふそう）は、それぞれ人参課、木実課、鑄鉄場と名称が変更されたが、専売制についてはそのまま引き継がれた。しかし、大蔵省からこれら事業は民営化することが望ましいとの指示もあり、1873年に人参課、木実課、鑄鉄場が廃止された。

②人参会社の設立

主要特産品のうち人参については、その経営に多額の資本を必要とすることから、あらかじめ有志者に人参製造会社を組織させ、これらに一括して設備などを払い下げることとなった。こうして、最初に設立されたのが第一人参製造会社であった。

明治時代の初期には人参の利益が大きく、人参ブームともいえるような状況を呈していた。このため、第一人参製造会社が設立されて以降も、相次いで会社の新設が続き、1876年（明治9年）末には会社数は11となり、さらに1882年には20社に達した。

③石見産紙会社の設立

石見地方での重要な産物であった和紙については、藩の専売制が廃止されるとともに、半官半民の組織である浜田県産紙会社が設立された。産紙会社は1872年に設立の認可を受け、1874年に発足したが、1876年に浜田県が廃止となり島根県に合併したことで、県からの資金援助が途絶え、

苦境に陥ることになる。このため、改めて民営に改組し、再出発を図ることとなった。

（２）士族授産事業

明治維新によって、士族の職業の自由が保障されることになったものの、多くの士族は職に就くことができず、窮乏状態に陥った。これら士族に職を与え、維新後の混乱状態を解消するために行われたものが士族授産事業である。

島根県では1874年（明治7年）以降、士族に対して各人の能力に応じた就産を勧めた。松江では、1874年頃から旧松江藩の士族などによって、蚕種製造組合、生糸商社、遂生会社、養蚕伝習所など養蚕製糸に関係する組合や会社が設立されるようになる。また、島根県では政府資金を基礎として士族授産事業の導入を図り、松江に麻苧（麻糸）紡織場が設立された。さらに、染物場、麻布織物場を設立して、士族授産のために供したほか、上述の政府資金をもとに、士族への養蚕事業の普及を目指した。

このほか、封建的な経済規則の撤廃と特権的制度の廃止により、商工業の自由化が推進されたが、このような中で、士族授産を目的とした人參会社や産紙会社、金融会社など数多くの民間会社が現れた。

4. 農林水産業

（１）畜産業

島根県は古くから牛馬の産地として知られていた。明治に入ってから牛馬の改良に努め、特に和牛においては全国有数の産地となり、「島根和牛」と呼ばれた。

中国山地は雨が多く草生が良好で、草の質についても柔らかく石灰分を多量に含むなど、牛の飼育に良好な環境であった。さらに、険しい山岳地帯であるため、体格の良い丈夫な牛を育てるための条件が整っていた。このことは、島根県のみならず、鳥取県、岡山県の山間部に質の良い牛の生産地帯が広がっていたことから明らかである。

和牛生産の発展は、単なる量的なものにとどまらず、質的なものにも及んだ。品種改良により、優れた資質を持つようになった牛の系統は一般的に蔓牛と呼ばれ、市場においては普通の牛より高

く評価された。島根県では、仁多郡の出雲八川牛^{やかわ}などが蔓牛として知られていた。

（２）林業

島根県の総面積のうち、林野面積は全体の約8割を占めており、必然的に林業は重要な産業の一つとなっていた。中でも、たたら製鉄に使用される木炭の製造が、最も重要なものであった。

明治時代に入ると、木炭は暖房用や工業用燃料などとして需要が増大し、大阪などの商業地へと輸送されていた。

明治時代末期から大正時代にかけては、通常の木炭（黒炭）から白炭への需要シフトがみられるようになり、飯石郡^{いひし}などでは伝習所を設置して白炭製造の技術伝習を進めていった。白炭は黒炭とは製炭方法が異なり、黒炭に比べ点火しにくいものの、炭質が硬く長時間の燃焼が可能で、ガスがほとんど出ないといった特徴がある。このような利点から、白炭は海軍工廠などの軍需工場をはじめとした工業用燃料として、あるいは阪神地方の菓子製造所、料理屋などで利用され、生産は大幅に増加していくことになる。

（３）漁業

浜田は日本海西部での重要な漁業基地であり、このため水産加工業も発達していった。古くから製造されていた水産加工品に乾魚があるが、1887年（明治20年）頃には浜田の漁業者がイカを天日乾燥して持ち帰り、対州スルメなどと称して販売していた。また、この地域の乾魚の代表的なものとして干しガレイがあるが、これは浜田港付近でカレイが豊富に獲れていたことによる。干しガレイの製造が始められたのは大正時代だが、瓦の取り引きのために浜田に滞在していた兵庫県の松森栄作が、廃棄されていたカレイに着目し、干しガレイの研究を始めたのがその起源である。

練り製品については、1892年（明治25年）に山口県萩から伝えられたとされている。大正時代に入ってから、練り製品を営む商店が増え、1921年（大正10年）の山陰線開通により販路が拡大し、浜田蒲鉾^{かまぼこ}の名声が高まっていった。

出雲地方には中海、宍道湖があつていずれも重要な水産業の拠点となっていた。特に、中海で水揚げされる赤貝はこの地方の特産物として県外に

多く出荷されていた。

出雲地方の水産加工品としては、意宇郡揖屋村（後：八束郡東出雲町，現：松江市）の蒲鉾がよく知られていた。かつて、揖屋村など中海を取り巻く農村では、それぞれの行商人が得意先の注文に応じて少量の蒲鉾などを製造していたが、明治時代に入って一般庶民の食生活が向上するにつれて、蒲鉾の需要が増えていった。大正時代に入ると蒲鉾が日常食となったことから需要が急増し、それまで家内工業であったものが、工場での量産形態へと変貌していった。こうして、揖屋の水産加工品は、浜田と並んで島根県内でも有数の生産量を誇るようになる。

5. 繊維産業の発展

(1) 綿業の衰退

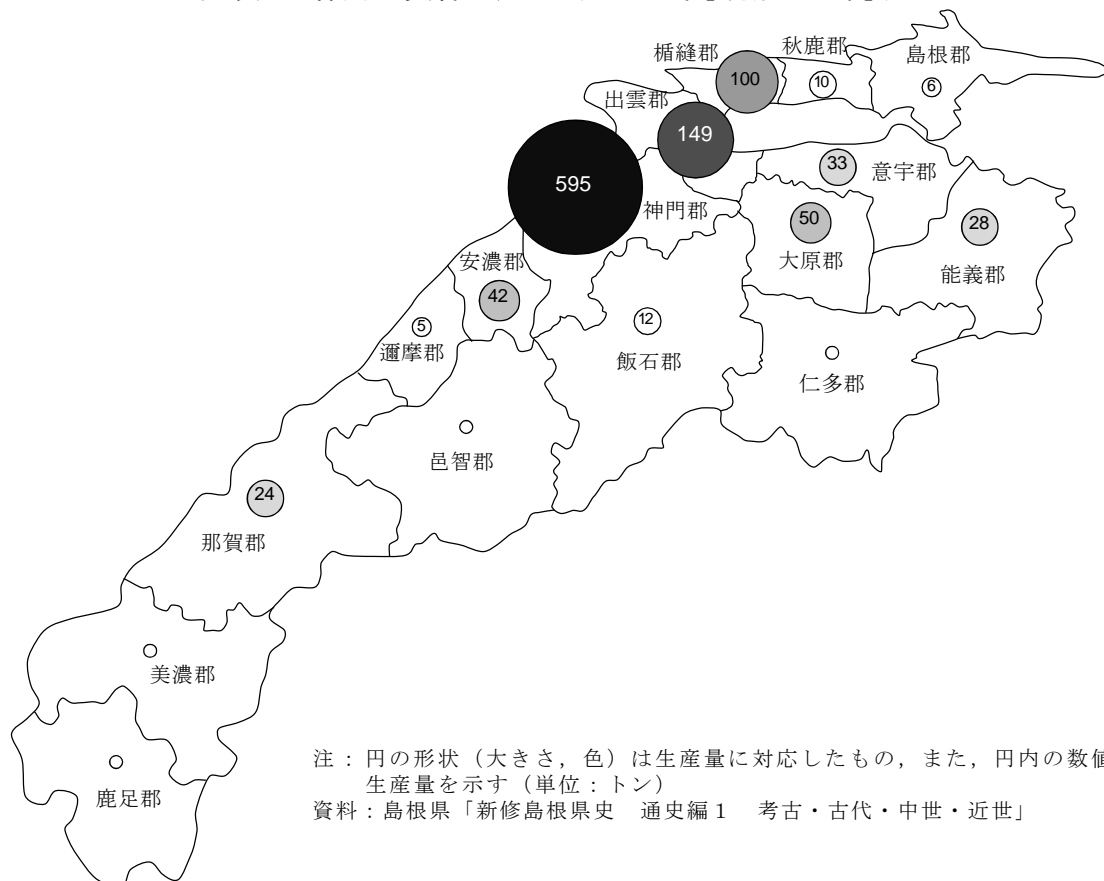
木綿の生産は既に触れたように、出雲地方の主要な産業として重視されていた。木綿の原料となる実綿の生産については、神門郡、出雲郡、楯縫郡の3郡の生産量が圧倒的に多く（図表4）、この

地方が県内の主要な木綿生産拠点となっていたことがわかる。

この頃、1郡当たり300トン以上の生産量があるのは、全国で22郡となっており、島根県の神門郡もその一つであった。このようなことから、出雲地方は島根県内のみならず、全国的にも重要な綿作地帯であったとみることができよう。さらに、楯縫郡では農産物に占める木綿の割合が米を上回るほどとなっており、それだけ郡内における綿の栽培が重視されていた。

しかし、1880年代半ば（明治10年代後半）頃になると、全般的な農村不況の中で需要が停滞し、粗製濫造による品質低下と輸入綿の増大によって、全国的に綿業は衰退傾向に入っていくことになる。わが国でも綿業が盛んであった近畿、中部、瀬戸内などでは早くに綿作が姿を消した。これは、平野部の綿作は灌漑用水が確保できるとともに稲作に変わり、都市周辺では蔬菜（野菜）に変わっていったことによる。こうした中で島根県は、鳥取、茨城などとともに綿業が残り、明治時代半ばにあっては最大の綿作県となっていた。

図表4 郡別の実綿生産量（1877年[明治10年]）



ただし、これは、島根県が綿作地帯として優れていたというより、他の先進綿作地が後退したことによるものという側面も強い。

加えて、出雲地方の綿業はほとんどが農家の副業であり、自営による家内工業であった。力織機の導入も限られたものであり、各農家が自家製の原綿を手織機を使って製品化する方式が主流であった。このため、明治時代半ば以降の綿花輸入関税撤廃運動の展開による輸入綿の増大は、各農家の綿作そのものに打撃を与え、さらに、倉敷紡績、鐘淵紡績など巨大資本による工場生産の展開は、近代化が遅れた出雲地方の綿業にとって壊滅的な影響をもたらすことになった。

(2) 養蚕業の発展

明治時代に入り衰退傾向にあった木綿に代わり、繊維産業の中心となったのが養蚕・製糸業であった。島根県では養蚕業を勸業政策の筆頭として、重点的な指導奨励を行ったこともあり、急速に普及していった。

繭から糸を製造する製糸技術について、初期は手引きによるものであったが、1884年(明治17年)頃から座繰製糸(糸車の操作や繰糸など作業の多くを手で行う方式)が導入されるようになり、能率が高まった。県内でも養蚕家の多かった仁多郡では、1889年(明治22年)に郡内屈指の地主であり実業家であった糸原武太郎によって、私立製糸伝習所が設立され、製糸技術の発展に大いに貢献したのであった。

このような県を挙げての養蚕・製糸業の奨励を背景に、県内繊維産業は綿業から養蚕・製糸業へのシフトが起きていくことになる。

図表5は綿業から養蚕・製糸業へのシフトを示す例として、島根県における蚕の飼料となる桑と綿の作付面積の推移を示したものである。1886年(明治19年)の段階ではまだ綿のウェイトが高かったものが、そのわずか8年後の1894年(明治27年)には逆転している。これ以降は、綿の作付面積がほぼ一貫して低下していったのに対し、桑は大きく伸びており、綿業に代わって養蚕・製糸業が飛躍的な発展を遂げていったことがうかがえる。

1895年(明治28年)に開催された殖産協議会に提出された県の議案では、養蚕業がこれまでの勸業政策上最も重点を置かれることになる。これにより、県の殖産十年計画に養蚕業が組み入れられた。1909年(明治42年)には、それまでの養蚕業の発展を踏まえ、さらに大きく飛躍することを目指して第二次殖産十年計画が策定された。ここでは、1907年を基準とした繭産額を10年後に4倍にするという計画が盛り込まれ、そのために桑園の拡張と改良が実施されることになった。こうして、明治時代半ばから昭和時代初期にかけて製糸生産高が大きく伸びるなど、養蚕業は目覚ましい発展をみせることになる。

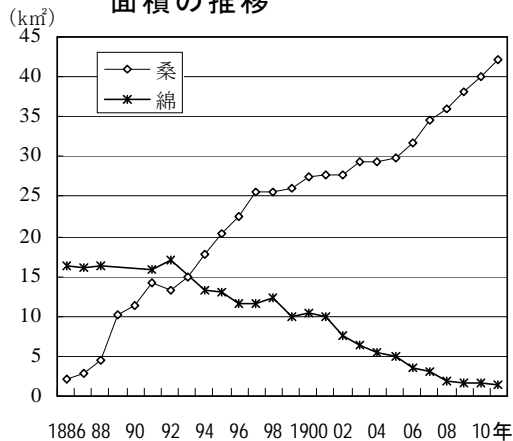
(3) 製糸業の近代化

① 製糸工場の設立

島根県において、明治期を代表する工業は前半は製鉄、製紙であり、半ば以降は生糸と織物だといわれている。1902年(明治35年)刊行の「島根県実業案内」では、島根県の主な物産の中で、工産物として生糸と織物が挙げられている。また、1910年(明治43年)刊行の「島根県商工業概要」では、生糸と織物に続き、紙、畳表、陶器、瓦、煉瓦、漆器、瑪瑙製品、缶詰、石材、蠟、銅鉄器などが挙げられているが、いずれにしても生糸や織物といった繊維産業が重要な産業であったことは間違いない。

製糸業は当初は座繰製糸による家内工業的なものが多かった。1887年頃には蒸気機関などの動力を用いた器械製糸がはじまり、養蚕業の進展で原料供給もスムーズに行われるようになったこと

図表5 島根県における桑と綿の作付面積の推移



資料：平田市誌編さん委員会「平田市誌」

図表 6 明治時代末頃の県内主要工場
(従業者数 30 人以上)

	創業年	所在地	従業者数 (人)	主要製品
榎原鋸	1860	仁多郡・阿井	34	鋼鉄
大森工場	1863	能義郡・広瀬	43	広瀬餅
安来製糸場	1887	能義郡・安来	80	生糸
山田製糸場	1887	簸川郡・大津	50	生糸
浜田製糸場	1887	那賀郡・浜田	70	生糸
松江蚕業株式会社製糸場	1888	松江	90	生糸
佐藤製糸場	1889	八束郡・宍道	98	生糸
松山製糸場	1890	簸川郡・荒茅	52	生糸
朝桜製糸場	1891	簸川郡・高松	50	生糸
松陽製糸合資会社	1893	松江	35	生糸
雲陽製糸場	1893	簸川郡・川跡	45	生糸
高津製糸株式会社	1893	美濃郡・高津	63	生糸
株式会社小西製糸場	1894	大原郡・木次	57	生糸
潮製糸場	1894	鹿足郡・津和野	41	生糸
前島製糸場	1897	簸川郡・荒木	49	生糸
山崎製糸場	1898	大原郡・屋裏	31	生糸
石陽製糸株式会社	1899	安濃郡・大田	58	生糸
製糸場	1900	仁多郡・三成	71	生糸
曾田製糸場	1900	簸川郡・荒木	40	生糸
平田両全株式会社第一製糸場	1902	簸川郡・平田	134	生糸
平田両全株式会社第二製糸場	1902	簸川郡・平田	151	生糸
平田両全株式会社第三製糸場	1902	簸川郡・平田	98	生糸
平田羽二重機業伝習所	1902	簸川郡・平田	31	羽二重
江津燐寸製造所	1902	那賀郡・江津	47	マッチ
経木真田伝習所	1905	簸川郡・杵築	57	経木真田
金山製糸場	1907	八束郡・宍道	41	生糸
杵築製糸場	1908	簸川郡・杵築	61	生糸

資料：島根県「新修島根県史 通史編 2 近代」

もあって、大規模工場による製糸業が行われるようになるなど、養蚕・製糸業の近代化が進んでいった。

図表 6 は明治時代末頃に島根県内で活動していた主な工場のうち、従業者数が 30 人以上のものであるが、これをみても分かるように、生糸工場の数が圧倒的に多い。しかも、生糸以外の工場に比べ総じて従業者数が多く、中でも簸川郡平田町（後：平田市，現：出雲市）に 1902 年（明治 35 年）に設置された平田両全株式会社の三つの製糸場はいずれも従業者数が 100 人前後となっており、当時としてはかなり大規模な工場であったといえる。この他にも、佐藤製糸場、松江蚕業株式会社など 100 人近い製糸工場がある。

また、これら製糸工場はいずれも 1887 年（明治 20 年）から明治時代末期にかけて設立されており、養蚕・製糸業が明治時代半ばから盛んになっていったことを裏付けている。さらに、従業者数 29 人以下の工場も含めると、明治時代の主要工場のうち 35 工場が簸川郡に、次いで 19 工場が松江に設置されているのに対し、邑智郡、那賀郡、鹿足郡など石見地方には 12 工場にとどまっ

ており、出雲地方に工場立地が偏っているといった特徴がある。これは、古くから繊維産業が盛んであった出雲地方において、製糸工場が数多く立地したことによる影響も大きい。

②平田両全株式会社

簸川郡は県内における製糸業の中心地であり、製糸工場も数多く立地していた。このうち、製糸業発展の主導的役割を果たしたのが平田両全株式会社であるとみられる。

平田両全の前身は、1889 年（明治 22 年）に設立された座繰製糸伝習所であり、この伝習所は 1892 年まで継続する。1893 年（明治 26 年）には社員を募集して合資会社平田製糸場と改称、器械製糸による操業を開始した。この平田製糸場が後の第一製糸場である。1900 年には平田製糸場に従来の製糸場と同規模の工場が設立され、能力増強が図られるが、これが後の第二製糸場となる。

1902 年（明治 35 年）になって平田製糸場は、同じく簸川郡平田町で製糸業を行っていた平田協益会社と合併し、平田両全株式会社が設立されることになる。その際、旧平田協益会社の工場が、平田両全の第三製糸場となる。1902 年における、平田両全の三つの製糸場での生糸生産量は約 15 トン（4,000 貫）であり、この時期の島根県全体の生糸生産量約 80 トンのうちほぼ 2 割に相当するほどであった。

ただ、平田両全の経営は必ずしも順調であったわけではなく、特に日露戦争（1904 年～1905 年）後の不況によって生糸価格の下落が起き、生産活動は一時休止に陥った。その後も、景気変動による影響を受けて収益が伸び悩み、経営は厳しい状況が続いていた。

こうして、1916 年（大正 5 年）には平田両全は鳥取県の米子製糸合名会社（1891 年〔明治 24 年〕創業）に吸収合併されることになったのであった。なお、米子製糸合名会社は 1917 年には株式会社へと改組し、さらに 1920 年には日本製糸株式会社となり、旧平田両全は日本製糸の平田工場となった。

日本製糸はその後も工場の新設や吸収合併などによってわが国有数の製糸会社へと成長していったが、昭和初期の戦時下にあつて企業統制が進む中で、1942 年（昭和 17 年）に近畿の日本レイヨ

ン株式会社（現：ユニチカ株）に吸収合併される。平田工場はその後もしばらくは同社の製糸工場として操業を続けていたが、1957年（昭和32年）に蚕糸部門の事業合理化により閉鎖された。

③美濃郡の製糸業

島根県では出雲地方のみならず、石見地方においても製糸業の発展がみられたが、これは幕末頃から津和野藩が養蚕業を奨励していたことによる。1888年（明治21年）には美濃郡高津村（現：益田市）に養蚕伝習所が設置され、新技術の普及が進んだ結果、繭の品質が著しく向上した。

ただ、この付近に大規模な製糸場がなかったため、1888年に松江に設置された県立短期製糸伝習所に2名の伝習生を入所させて技術を習得させ、翌1889年にはこの伝習生を中心に座繰製糸を開始した。さらに、1891年から1893年にかけて長野県、鳥取県などの先進地に伝習生を送り込み、器械製糸の技術を修得させ、1893年に高津村に器械製糸による東大谷・大谷の両製糸場、および高津製糸株式会社が設立された。

東大谷・大谷製糸場は1895年（明治28年）に大谷製糸合名会社へと社名変更し、さらに1899年には石美製糸株式会社へと改組・改称して一時は美濃郡随一の生産量を誇っていたものの、生糸価格暴落の影響を受けて1902年（明治35年）に破産した。一方、高津製糸株式会社は設立された翌年の1894年から操業を開始し、従業者数では県内工場の10番以内に入るという大工場であったが、生糸価格の下落や経営の失敗などもあり、1912年（大正元年）頃には事業を中止した。

④その他の製糸業

出雲地方では、簸川郡に次いで製糸業が盛んに行われていたのが松江市であった。松江市には1888年創業の松江蚕業株式会社、1893年創業の松陽製糸合資会社などがあり、当時は生糸が最も重要な生産物となっていた。

石見地方の西部、旧津和野藩のエリアにあった鹿足郡は、美濃郡とともに石見地方における製糸業の中心地であった。1894年（明治27年）には潮製糸場が設立され、その後、明治時代末にかけて9カ所の製糸場が操業を開始したが、潮製糸場以外はいずれも小規模なものであった。

石見地方の東部、^{あの}安濃郡大田町（現：大田市）には、県内でも比較的従業者規模の大きい石陽製糸株式会社が1899年（明治32年）に創業したとされている。一方で、1896年（明治29年）に大田町内に座繰製糸による製糸場が発足しており、これを石陽製糸の創立とする記述もあり、同社の詳細な経緯は不明である。

なお、この石陽製糸は明治時代末期には解散したが、その後を受けて大正時代に安濃郡の養蚕製糸業の中心となったのは、京都の郡是製糸と岩国の義濟堂^{ぎせいどう}であった。製糸会社は繭の集荷に当たって繭の生産地^{かんげん}に乾繭場を設置する必要があり、旅館などに簡易施設を設置していた。石陽製糸の解散後は、郡是製糸が^{しずま}邇摩郡静間村（現：大田市）に出先機関を置いていたが、1920年（大正9年）には大田町に乾繭場を設置し、石見地方全域からの繭を集荷する拠点とした（1935年[昭和10年]閉鎖）。

これに対し、義濟堂は邇摩郡宅野村（後：仁摩町、現：大田市）を拠点として石見地方東部の農村から繭を集めていたが、安濃郡川合村（現：大田市）、同郡大田町に進出して乾繭場を設置し、石見地方の東部から那賀郡にかけての広い範囲で繭を集荷した（1921年[大正10年]閉鎖）。

（４）織物業

①羽二重

松江市の羽二重^{はぶたえ}（高級絹織物の一種）は、松江蚕業株式会社の社長が1892年（明治25年）に、わが国有数の羽二重の生産地であった福井に訪れ、技師を連れ帰って会社で試織させたことに始まる。その後、県の奨励もあって羽二重の生産は徐々に増大していく中、1906年（明治39年）に松江羽二重伝習所が設立された。ここでは、女性労働者の技術習得を促進し、これによって羽二重生産の増強を図ったのであった。

また、県内繊維業の中心地であった簸川郡においても、1894年に大津村（現：出雲市）で羽二重の製造が始まっている。明治の末期に大津村で創業した羽二重の個人企業としては、西村織物工場があった。

石見地方では、羽二重の生産を行うために、1897年（明治30年）に津和野町立機業伝習所、石西機業伝習所が設立されている。津和野の伝習所

は1899年に廃止されたが、町内の機織業者によって機業組合が設立され、伝習所の再建を図った。さらに、益田の業者と共同して石見機業連合会を組織し、製品販売方法を確立するなど羽二重の発展を図った。

② 綿織物

畑作の綿は養蚕の普及によって桑畑に変わり、農家の手織の木綿は衰え、都市からの機械織による綿布が入ってきて自家生産の綿織物を圧倒するに至った。

このように機械を用いた綿織物が次第にウェイトを高めていったため、これに刺激されて1897年（明治30年）に操業を開始したのが今市機業場である。この工場が従来と異なっていたのは、地元の原料を使わず大阪の天満紡績から原料綿を購入し、人件費の安価な地元で製造を行っていたことである。この時代にありながら、いわゆるコストダウンを図るなど、小規模ながらも資本主義的な様相がみられるという点に、今市機業場の大きな意義があったといえる。

また、簸川郡においては木綿縮（表面に細かなしわのある夏用の生地）の工場が設置され、大阪や九州などへ製品を出荷していた。この木綿縮は1891年（明治24年）に松江で初めて製造され、以後松江市やその近隣、簸川郡内で普及していったものであり、出雲縮、あるいは八雲縮などとも呼ばれていた。

その後、簸川郡では綿織物の品質改良を行うなど事業の発展を図ったが、日露戦争後の不況による打撃や粗製濫造による信用の低下などから、明治時代末期かけて大きく衰退していくことになる。綿織物工業の草分け的存在であった今市機業場も、創業から13年ほどで不況のため廃業した。

③ 広瀬緋

江戸時代に米子から伝わった広瀬緋（かすれたような幾何学模様などの入った生地）は、幕末には他地域に売り出すまでに発展していたといわれている。1887年（明治20年）頃には織機が改良され、糸も手挽きから紡績によるものに改められたことから能率が向上した。

1893年（明治26年）には能義郡広瀬町（現：安来市）に広瀬緋の製造工場が設置され、さらに

1896年には広瀬緋同業組合が組織された。製造技術に関しては、1898年に同業組合直営の伝習所が設置され（翌年から私立伝習所として引き継がれる）、職員の養成が行われた。販売面では、1899年（明治32年）に設立された広瀬緋一手販売株式会社は1907年（明治40年）に破産したものの、後に広瀬緋製造会社が設けられた。

こうして、広瀬町内には明治時代後半から末期にかけて数十の工場が設置され、仁多郡にも工場が立地するほどとなり、製品も能義郡内はもちろん、仁多郡、八束郡などへと広まっていった。さらに、県外への販売も行われ、大阪、東京、北海道方面にまで拡大していった。

しかし、1909年（明治42年）になって、県の指導もあって染料が藍から化学染料へと転換したことをきっかけに、衰退の道をたどることになる。広瀬緋は藍染めであったため、洗い栄えがすること、穴があいても生地は破れないという耐久性が評価されていたが、この利点は化学染料の使用によって失われた。化学染料の使用はコスト低下にはつながったが、品質の低下を引き起こし、広瀬緋の優位性が薄れていくことになった。

その後、1915年（大正4年）に発生した広瀬町の大火災で機器類を焼失するなどダメージを受けた広瀬緋は他産地に遅れをとるようになり、第二次世界大戦後に生産者は激減したのであった。

（公）中国地方総合研究センター 広実 孝
（中国電力株式会社より出向）

《参考文献》

- 島根県『新修島根県史 通史篇1』（昭和43年）
 - 〃 『 〃 通史編2』（昭和42年）
 - 松江市誌編さん委員会『新修松江市誌』（昭和37年）
 - 出雲市役所『出雲市誌』（昭和26年）
 - 平田市編さん委員会『平田市誌』（昭和44年）
 - 安来市誌編さん委員会『安来市誌』（昭和45年）
 - 島根県大田市役所総務課『おおだ』（昭和37年）
 - 浜田市誌編纂委員会『浜田市誌 上巻』（昭和48年）
 - 江津市誌編纂委員会『江津市誌 下巻』（昭和57年）
 - 矢富熊一郎『益田市史』（昭和38年）
 - 東出雲町誌編さん委員会『東出雲町誌』（昭和53年）
 - 木次町誌編纂委員会『木次町誌』（昭和47年）
 - 横田町誌編纂委員会『横田町誌』（昭和43年）
- ほか、各市町村史・誌、社史など